

感動詞の認識に関する音声上の問題について

石川 創*

Phonetic Issues in Relation to the Recognition of Interjections

So ISHIKAWA*

Abstract

This paper discusses problems with interjections in modern Japanese. First, the documentation of interjections was surveyed in 28 different modern Japanese dictionaries so as to determine words that are now typically regarded as interjections. Then, from among these, those that had particularly unnatural phonetic properties were highlighted, and their respective problems were identified. The specific classes of interjection considered are as follows: (1) words with unnatural tones, such as “mā mā” and “ā, a,” and (2) words ending in *sokuon*, such as “あっ” and “わっ.” The problem with such words is that in the case of (1), they break an accent rule in Japanese that “two high strokes do not appear in the same word,” and in the case of (2), the terminal *sokuon* as a phoneme has already disappeared in modern Japanese, such that its utterance is neither recognized by speakers nor can be an element for discriminating meaning. In this study, through phonetic analysis and a diachronic survey of materials, it is indicated that neither (1) nor (2) can appropriately be regarded as having existed originally as single-word interjections.

キーワード：感動詞 アクセント イントネーション 語末促音 国語辞書

1. はじめに

「感動詞」という術語は、大槻文彦が用いた¹ことから一般に広まったといわれており、近代以降、感動詞の品詞としての定義や用法の研究が重ねられてきた。

しかし感動詞の研究が進み、さまざまな観点から意味分析が行われる一方で、感動詞の「語

形」の問題についてはあまり注目されていない。感動詞は「実際の発話の場面で声に出して発せられること」が前提であるにもかかわらず、音声の上で不自然・不適当な語形が独立した「語」として認識されていることも多い。

本稿では、感動詞は一般的にどのように認識されているのかをあきらかにし、その上で、古

*人文学部 日本文化学科

辞書や文学作品等における記述を通時的に調査したり、音調を観察したりすることを通じて、感動詞の認識に関する音声上の問題点を指摘する。

2. 現代の小型国語辞書における感動詞の収録状況

2.1 調査の概要

現代日本語において、感動詞は一般的にどのように認識されているのかを考えるにあたり、本稿ではまず小型国語辞書の見出し語を調査することにした。小型国語辞書がおさめる語は日常的に使用する語彙が中心であり、おおむね世間一般に感動詞として認められている語が掲載されていると考えられるからである。

近年では清水泰生が国語辞書と感動詞の関係をあつかっており²、小型国語辞書における感動詞（・応答詞）の見出し語の有無や表記のほか、感動詞における待遇表現、類義語等の問題を考察している。清水が調査の対象とするのは5冊の辞書と39語の感動詞であるが、本稿では小型国語辞書に収録されている感動詞について、全体的な調査をおこなう。

本稿の調査対象としたのは、以下のア～オの28冊である。

ア. 2000年以後に最新版が刊行された辞書の初版（昭和30～40年代）6冊

イ. アの辞書の最新版6冊

ウ. 主に2000年以後に刊行された小型国語辞書8冊

エ. 2000年以後に刊行された中学生を主な対象とする小型国語辞書4冊

オ. 2000年以後に刊行された小学生を対象とする小型国語辞書4冊

それぞれの小型国語辞書の本稿における略称、ならびに書誌情報は表1のとおりである。ただし編者や監修者の氏名については省略した。

調査の概要は以上のとおりである。次節ではそれぞれの辞書から感動詞を抽出するための方法、ならびに調査の結果を示す。

2.2 調査方法・結果

本節では、前節で示した28冊の辞書から感動詞を抜き出す作業をおこなうが、見出しの立て方やリダイレクトの見出しにおける品詞表示の有無などは、辞書によって異なる。そのため、作業にあたり、以下の(a)～(d)の基準を設けた。

(a) 語釈のないリダイレクトの見出しであっても、品詞表示の記号があれば感動詞として認定する。たとえば「ああ（感）→あ」の場合、「ああ」を感動詞とする。

(b) 語釈中に異形態が示されていても、それを感動詞としては認定しない。たとえば「あら」の語釈に「『あらあ』ともいう」とあっても、「あらあ」を感動詞としない。

(c) 他品詞の語釈中に感動詞の用法が示唆されていても、品詞表示の記号がなければ感動詞としては認定しない。たとえば形容詞「よろしい」の語釈に「承認の感動詞としても用いる」とあっても、感動詞の用例としない。

(d) 仮名遣いの異なるものであっても、各見出しで感動詞の品詞表示があれば、それぞれを異なる感動詞として認定する。

以上の基準によって各辞書の見出し語を調査した結果、ア～オの28冊から、異なりで575語の感動詞が得られた。表2は各辞書の感動詞の収録状況をまとめたものである。

表2について、「感動詞数」の欄の括弧内の数字は、全収録語数に対する感動詞数の割合（百分率）である。ただし「収録語数」は具体的な数字を示す辞書と、「約〇万〇千」と概数を示す辞書があるため、感動詞数の割合も正確な数字ではない。「採用度」とは、その辞書が感動

〈表1 本稿で調査対象とした小型国語辞書について〉^{3,4}

	略称	辞書名、版数、版元、刊行年月
ア	新選1	『新選国語辞典』初版（小学館、1959年11月）
	旺文社1	『旺文社国語辞典』初版（旺文社、1960年10月）
	三省堂1	『三省堂国語辞典』初版（三省堂、1960年12月）
	岩波1	『岩波国語辞典』初版（岩波書店、1963年4月）
	講談社1	『講談社国語辞典』初版（講談社、1966年11月）
	新明解1	『新明解国語辞典』初版（三省堂、1972年1月）
イ	新選9	『新選国語辞典』第9版（小学館、2011年1月）
	旺文社11	『旺文社国語辞典』第11版（旺文社、2013年10月）
	三省堂7	『三省堂国語辞典』第7版（三省堂、2014年1月）
	岩波7新	『岩波国語辞典』第7版新版（岩波書店、2011年11月）
	講談社3	『講談社国語辞典』第3版（講談社、2004年11月）
	新明解7	『新明解国語辞典』第7版（三省堂、2012年1月）
ウ	三現新4	『三省堂現代新国語辞典』第4版（三省堂、2011年2月）
	集英社3	『集英社国語辞典』第3版（集英社、2012年12月）
	学現新5	『学研現代新国語辞典』改訂第5版（学研教育出版、2012年12月）
	現国例4	『現代国語例解辞典』第4版（小学館、2006年1月）
	明鏡2	『明鏡国語辞典』第2版（大修館書店、2010年12月）
	小日新1	『小学館日本語新辞典』初版（小学館、2005年1月）
	新小辞5	『新小辞林』第5版（三省堂、1999年8月）
	デイリ5	『デイリーコンサイス国語辞典』第5版（三省堂、2009年6月）
エ	学現標2	『学研現代標準国語辞典』改訂第2版（学研教育出版、2011年12月）
	例解新8	『例解新国語辞典』第8版（三省堂、2012年1月）
	旺標国7	『旺文社標準国語辞典』第7版（旺文社、2011年11月）
	ベネ新2	『ベネッセ新修国語辞典』（ベネッセコーポレーション、2012年3月）
オ	例解学9	『例解学習国語辞典』第9版（小学館、2011年3月）
	学習新4	『学習新国語辞典』第4版（講談社、2011年12月）
	三例小5	『三省堂例解小学国語辞典』第5版（三省堂、2013年1月）
	文小国5	『文英堂小学国語辞典』第5版（文英堂、2011年3月）

詞として掲載する語が、今回調査対象とした28冊の辞書において、どの程度感動詞として採用されているかの平均を示したものであり、最高で28.0となる。たとえば「あ」は17の辞書が、「ああ」は27の辞書が感動詞として見出しに立てているが、仮にこの2語だけを収録する辞書があったとすると、その辞書の採用度は $(17+27) \div 2 = 22.0$ となる。

なお『新選9』については、「こんにちは」などが品詞に準ずる「あいさつ」として分類さ

れており、それを感動詞に含めて集計した。凡例では「あいさつ語の多くは、感動詞・名詞や連語に属するが、この辞典では、とりたてて一類とした」⁵と説明されている。217語の内訳は、感動詞151語・「あいさつ」66語である⁶。

以下に、表2の調査結果からわかることを簡潔にまとめる。

(1) 収録語数が多い辞書は、感動詞の数も多くなる傾向が見られるが、比例しているとはまではいえない。辞書によって感動詞数の

〈表2 小型国語辞書の収録語数と各辞典に採用される感動詞の数〉

辞書・版	収録語数	感動詞数	採用度	辞書・版	収録語数	感動詞数	採用度
新選1	70,000	133(0.19)	15.2	学現新5	75,600	198(0.26)	15.6
旺文社1	75,000	78(0.10)	17.3	現国例4	69,000	160(0.23)	16.1
三省堂1	57,000	119(0.21)	16.4	明鏡2	70,000	187(0.27)	15.7
岩波1	57,000	72(0.13)	19.3	小日新1	63,000	163(0.26)	16.4
講談社1	72,000	147(0.20)	16.8	新小辞5	55,000	89(0.16)	18.7
新明解1	69,885	186(0.27)	14.9	デイリ5	73,500	272(0.37)	12.0
新選9	90,320	217(0.24)	13.4	学現標2	50,000	118(0.24)	19.3
旺文社11	83,500	168(0.20)	13.4	例解新8	58,000	114(0.20)	18.5
三省堂7	82,000	377(0.46)	7.8	旺標国7	47,000	108(0.23)	19.4
岩波7新	65,000	98(0.15)	18.1	ベネ新2	47,000	95(0.20)	19.3
講談社3	76,000	166(0.22)	16.8	例解学9	35,000	52(0.15)	21.7
新明解7	77,500	216(0.28)	13.8	学習新4	35,000	76(0.22)	20.0
三現新4	74,000	184(0.25)	15.4	三例小5	34,000	60(0.18)	21.5
集英社3	95,000	229(0.24)	13.6	文小国5	30,000	56(0.19)	22.1

割合にはゆれがある。

- (2) 全575語の感動詞のうち、もっとも収録数の多かった『三省堂7』でも377語であり、次に数の多かった『デイリ5』では277語となり半数を割り込むことから、辞典によって採用する感動詞（の語形）には少なからぬ違いがあることがわかる。

- (3) 昭和30～40年代初版の辞書(ア)とその最新版(イ)とを比べると、イの方が感動詞の数が多く、割合も高くなっている。現代の国語辞典が改訂されてゆく過程において、感動詞が重視されるようになったといえる。

- (4) 2000年以後の辞書において、一般向け(イ・ウ)、中学生向け(エ)、小学生向け(オ)の順で、採用度が高くなる傾向が見られる。対象年齢が低くなるにつれて、より「一般的な」感動詞が採用されていることがわかる。

(2)について補足をすると、『三省堂7』の感動詞数が他の辞書に比べ非常に多く、また採用度がきわめて低いのであるが、『三省堂国語辞典』第6版(2008)における感動詞の収録数は274語であり、第7版では100語以上が追加され

たことになる。『三省堂7』にしか収録されていない感動詞は88語あり、これが採用度を大きく下げた要因であろう。

また(4)に関連して、ア～オの28冊すべてに掲載されたのは「いざ、いな、オーライ」の3語、27冊に掲載されたのは、「ああ、いや、くそ、さようなら、さらば、どれ、ね、もしもし」の8語、26冊に掲載されたのは「あっぱれ、いやはや、おのれ、おめでとう、はて」の5語である。掲載される辞書が多いほど、その感動詞は「一般的な」語であると考えられるが、掲載数が上位の語については、日常会話においてあまり用いられないものも多い。

以上、本節では現代の小型国語辞書における感動詞の収録状況を確認した。第3節以降は、本節で抽出した語を観察し、現代日本語における感動詞の認識に関する問題点をとりあげる。第1節で述べたとおり、本稿では音声上の問題を中心にあつかい、第3節では感動詞の「音調」、第4節では感動詞の「語末促音語形」の問題についてとりあげる。

3. 感動詞の音調について

日本語のアクセントの一般的な特徴として、「一語のうちで高く発音される拍が、離れた場所にあることはない」⁷ということがある。しかし国語辞書の語釈を見ると、感動詞に関しては、アクセントの記述が不自然な場合がある。下に示すのは『三省堂7』における「まあまあ」の語釈である。

まあ まあ ㊦ (副) ①「まあ」をくり返し、気持ちを強めた言い方。「—おちついて」
②完全にではないが、ある程度まで行っているようす。「—知っている・—満足した」
㊧ (感) [女]「まあ」を強めた言い方。「—お久しぶり」アク ㊦②まあまあ。他は、まあまあ。

『集英社3』においては「まあまあ」のアクセント核をはじめの「ま」とした上で、「まあまあこんなに汚して」という例文をあげているが、この「まあまあ」の音調が「高低低低」では不自然である。ア～オの28冊のうち、19冊が「まあまあ」を感動詞として認定しているが、これは「語」として認定してよいのであろうか。

「まあまあおちついて」、「まあまあ {お久しぶり／こんなに汚して}」のような場合、「まあ」を3回以上重ねて発話することが可能であり、「まあまあ」という語形に特別な意味があるわけではない。これらの用例における「まあまあ」に「強め」の意味があるのだとすれば、それは「まあ」という語を「かさねる」ことに起因しており、「まあ」とは別に「高低高低」のアクセントを持つ「まあまあ」という語があるわけではないということである。

「まあまあ」のような重畳形の音調のほかにも、一般的な規則から逸脱した「アクセント」表記はみられる。以下は『三省堂7』における「あー

あ」、「そーお」の語釈である⁸。

あーあ (感) [話] [二番めの音 (オン) を下げ、三番めの音を上げて言う] ①いやなことが〈ずっと続く／やっと終わった〉ときに出す声。②どうしようもないときに出す声。「—、こわれちゃった・—、昔に帰りたい」▽あああ。

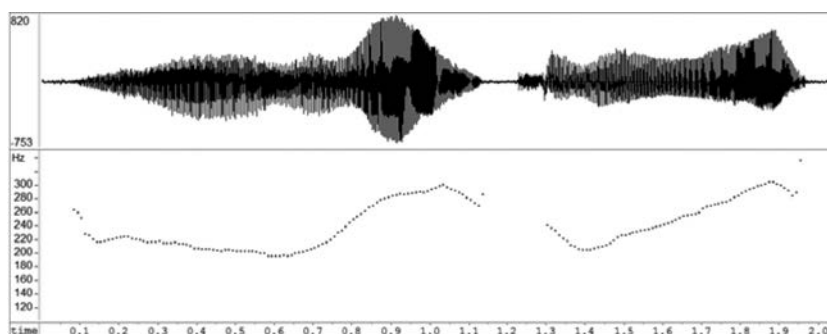
そーお サウオ (感) [女] [一度下げてまた上げる調子で] 相手の言うことに疑問の気持ちをあらわすことば。そうお。「あら、—」

これらも「高低高」の音調を持つ「語」であると記述されている。これらは、感動詞「あ(あ)」や「そう」とは別のアクセントを持った独立した語であるのだろうか。

「そーお」については、「疑問」をあらわす場面において、「それ、なーに」(<「なに」)、
「この服、どーお」(<「どう」) など、のばしながら下降し、その後上昇する場合が多く見られる。つまりこの音調は、感動詞「そう」を発話した際にあらわれた「疑問」のイントネーションであり、「高低高」というアクセントを持った「そーお」という語があるわけではないことがわかる。

それでは「あーあ」についてはどうであろうか。「あーあ」の一度下がってまた上がるという音調は、もちろん「疑問」をあらわすものではない。しかし「あーあ」が発せられるときの感情に注目すると、やはりこれも「アクセント」の問題ではないことが見えてくる。図1は、30代女性に「あーあ、ざんねん」と書いた紙を見せ、それを読み上げてもらった音声の波形とピッチ曲線である。音声の分析は WaveSurfer⁹ によった。

このように「あーあ」と「ざんねん」は、一度下がったのちに上昇し、末尾でまた少し下が



〈図1 「あーあ、ごんねん」の音調〉

るといふ同様の音調を示す。これは「あ(あ)・「ごんねん」の個々のアクセントとは異なり、「なげき」のような場合に特有の、発話上の音調といえる。すなわち「あーあ」は「高低高(低)」というアクセントを持った独立した語ではなく、感動詞「あ(あ)」の発話上のイントネーション(およびのぼし)の問題である。

以上、本節では感動詞の音調の問題をとりあげた。「まあまあ」などは語を「かさねる」ことの用法、「あーあ」などは語を「文として発話する」時のイントネーションの問題であり、独立した一語としてとらえるべきではないというのが、本節のまとめである。

4. 感動詞の「語末促音語形」に対する意識の変遷

4.1 「語末促音語形」の問題点

本節で問題とするのは、「あっ、えっ、わっ、……」など、現代日本語では語末に小書きの「っ・ッ」(近代以前では一般的に並字の「つ・ツ」)を表記する感動詞であり、本稿ではこれを「語末促音語形」の感動詞と呼ぶ。

語末促音語形の感動詞は現代の文章では多く見られ、一般に独立した「語」として認識されている。本稿で調査した28冊の辞書に採録される語末促音語形は、「あっ、いよっ、うえっ、うっ、えいっ、えっ、きゃっ、ぎゃっ、しっ、しっしっ、それっ、ちえっ、ちっ、ちっちっ、とっ、はっ、

ははっ、ぶはっ、めっ、やっ、わっ」の21語である¹⁰。

しかし現代日本語においては「語末促音」という音素が消滅しており、那須昭夫が指摘するように、日本語では促音終わりの語形は基本的に認められない¹¹。語末促音語形について、語末の声門閉鎖であると定義する立場もあるが¹²、音素が存在しない以上、話し手は発話末の促音を意識することがないし、聞き手もそれを認識することができない。

それにもかかわらず、国語辞書においては、たとえば「あっ」について「おどろいたとき、感心したときや、思わず何かに気がついたときなどに出す声。」(『新選9』)、「驚いた時などに思わず発する声。」(『岩波7新』)、「ひどく驚いた(感心した)時や、思わず何かに気がついた時などに出す、言葉とも言えない声。」(『新明解7』)などと語釈がなされている。感動詞の先行研究においても、語末促音語形を「驚き」をあらわす語として分類することが多い¹³。すなわち、「驚き等の表出の際に、語末促音語形の感動詞が声に出して発せられる」というのが現在の一般的な解釈である。

音素が消滅している語末促音語形が、なぜ現代において感動詞の語形として定着しているのか、文献上の表記を通時的に観察することで明らかにしたい。

4.2 近世以前の語末促音語形

はじめに、古辞書における語末促音語形について確認しておきたい。16世紀以前の辞書では、観智院本『類聚名義抄』(1251書写)¹⁴や『易林本節用集』(1597)¹⁵において「噫」の字に「アツ」の訓をあてる例が見られる。

そして、イエズス会編『日葡辞書』(本編1603、補遺1604)¹⁶の補遺には「AT.」(あつ)が採録されており、本編の「Aa.」(ああ)、ならびに「Ah.」(嗚呼)とは明確な「別語」として扱われている。なお「AT.」以外にも、本編に「Vot.」(おつ)、補遺に「Yat.」(やあつ)の語末促音語形が採録されている。

「ああ(嗚呼)」と「あつ」にはそれぞれ異なる語釈が付されており、「Aa.」(ああ)は「苦しみや、悲しみの感動詞.」、 「また、喜びの感動詞.」、 「また、疑いの感動詞.」、 「また、この語は、人の言ったことに同意したり、是認したりする時に、‘そうだ’と答える助辞である.」、 「Ah.」(嗚呼)は「驚嘆などの意を表わす感動詞.」、そして「AT.」(あつ)は「人に呼ばれて答えるのに用いる感動詞.」とある¹⁷。『日葡辞書』編纂当時には日本字音に-tの入声音が残っていた¹⁸ので、[a(:)]と[at]の聞き分けはできたであろうが、実際に語末の-tによって意味が使い分けられていたとは考えにくい。たとえば大蔵虎明書写の古本能狂言(1642)のうち、「大名狂言類」の「鼻取ずまふ」には以下のような「あつ」の例がある¹⁹。

(太郎冠者) それハともかくも御分別次第でござる (大名) 御分別したいと云ハ、身がまゝじやと云事な (太郎冠者) あつ、さやうでござる

また慶長八年(1603)に出版された古活字版の『太平記』・巻第二「長崎新左衛門尉意見事付

阿新殿事」には、次のような一節が見られる²⁰。

本間三郎カーノ太刀ニ智ヲ通サレテアツト
云聲ニ番衆トモ驚騒テ火ヲ燃シテ是ヲ見ル
ニ血ノ付タルチイサキ足跡アリ

前者は「同意」、後者は「驚き」あるいは「苦しみ」にあたる「あつ」の用例であり、これは『日葡辞書』では「ああ・嗚呼」の意味にしているものである。こうした例を見るに、「ああ」([a:])と「あつ」([at])は厳密に使い分けられていたわけではないと考えられる。

上記の例をはじめとして、中世以降の劇文学や小説類においては感動詞の語末、あるいは文末・文節末に「つ・ツ」表記をする例が見られる。近世後期の式亭三馬『浮世風呂』(1809-13)においては、「いつまでもこゝに稲荷や福の神ツ。アイ和尚お久しぶり朝坊主丸まうけツ」²¹、「妹『おつかア 金『ホゝツ、おつかアか。にくい母めだの。うなゝをしてやらう。可愛坊に灸ウすえて』²²(いずれも前編巻之上「朝湯の光景」より)など、感動詞の語末、ならびに文末・文節末の「ツ」表記が多用されている。

しかしさきに述べたとおり、実際に語末の-tによって意味の区別が行われていたかはうたがわしく、近世の後期にはその入声音も消滅している。そうだとすれば、「つ・ツ」表記は何をあらわすために用いられていたのであろうか。

語末促音語形の意味に言及したものとして、喜多村筠庭の『嬉遊笑覧』(1830年自序)があり、「おてつ」ということばについて、「おて」と強く言うことを「ツ」を用いて書き写した、という旨が述べられている²³。つまり、語末(文末・文節末)の「つ」表記は語末の声門閉鎖等を示すものではなく、その語を「強く発音すること」をあらわす標識であったということである。これはあくまで喜多村筠庭の見解であり、当時の一

般的な解釈であったとはいえないが、そうした認識が一部にあったということは考慮に値する。

次節では、語末促音語形が増加する近代の用例を観察する。

4.3 近代における語末促音語形

4.3.1 近代国語辞書における語末促音表記

近代における語末促音語形について調査するにあたり、はじめに国語辞書における語末促音語形の収録状況を確認する。

結論からいえば、語末促音語形を掲載する国語辞書の数はあまり多くない。上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』（金港堂書籍、1915-19）²⁴や『大辞典』（平凡社、1935-38）²⁵のような大型国語辞書に「あっ、えっ、はっ、わっ、……」（『大辞典』の見出しはかたかな書き）等の語が掲載されているほか、山田美妙『大辞典』（嵩山堂、1912）²⁶に「あッ、えッ、はッ」など、『官版語彙』巻二（1871）²⁷に「あつゝ」が見える例などがある。

『官版語彙』では、「あつゝ」のような見出し語の「つゝ」表記について、凡例に「促呼音には小黑圈を附す」²⁸と説明されており、また『大辞典』（平凡社）の「アッ」の語釈には「噫との促音便」と書かれている。さらに「あっ（アッ）」について、『大日本国語辞典』には「感嘆・危急・又は驚く時などに發する聲」、『大辞典』（平凡社）には「驚異または喜怒哀樂の際などに思はず發する聲」と語釈がなされている。

前節において、語末の「つゝ」表記は当該の語を強く発音することをあらわしているという喜多村筠庭の見解を示したが、国語辞書の記述をみると、近代の時点で語末の「つゝ」表記が「語末の促音」と認識されていたこと、またそれは「驚き」等を表出する際にあらわれるものであるという、現在の一般的な解釈（4.1参照）が成立していたことがわかる。言い換えれば、

「語末促音」に該当する音声が「驚き」等を表出するという現代における認識は、近代の国語辞書の意味記述が大きく影響しているといえるであろう。

次節では、語末促音語形（ならびに文末・文節末の「つゝ」表記）が、近代の小説等においてどのように用いられていたかを調査する。

4.3.2 雑誌『太陽』にみる語末（文末・文節末）促音表記

近代の小説類における語末促音語形、ならびに文末・文節末促音表記について調査するにあたり、本稿では国立国語研究所編の『太陽コーパス』²⁹を利用することとした。これは雑誌『太陽』（博文館、1895-1928）のうち、1895、1901、1909、1917、1925年の各12冊（臨時増刊をのぞく）を対象としたコーパスであり、大量のテキストにもとづき、現代語の確立期における表記の変遷をたどることができる。

語末促音語形、ならびに文末・文節末の促音表記の使用実態を明らかにするために、文末・文節末の“「つゝ」+ {句点、読点、感嘆符、疑問符、かぎ}”の用例数を調査した。具体的には以下の12の文字列で本文検索を行い、不適当な用例をのぞいたもの³⁰を数えた。

つ。 つ、 つ！ つ？ つ」 つ』 ツ。
ツ、 ツ！ ツ？ ツ」 ツ』

なお小書きの「つゝ」についても同様に検索をおこなったが、用例はなかった。調査結果をまとめたものが表3である。

括弧内の数字は、感動詞の語末促音語形の用例数³¹を示したものである。全用例のうちの約8割が感動詞であり、文末・文節末の「つゝ」表記は、感動詞と結びつき、語末促音語形とつくることが多かったといえる。

数字だけを見ると、1901年に急激に文末・文節末の「つゝ」表記の用例が増え、その後

〈表3 雑誌『太陽』における文末・文節末「つ・ツ」表記の用例数の推移〉

	1895	1901	1909	1917	1925	計
つ	0(0)	0(0)	7(6)	6(5)	8(7)	21(18)
ツ	7(3)	111(97)	50(39)	23(11)	66(46)	257(196)
計	7(3)	111(97)	57(45)	29(16)	74(53)	278(214)

1909年・1917年には減少に転じ、1925年にあらためて用例が増えたように見える。しかし、特に1901年は一部の著者に用例がかたよっており、全111例のうち、「ツ。」は22例であるが、うち17例が広津柳浪によるものである。また、「ツ、」71例のうち、内田露庵が26例、広津柳浪が21例であり、さらに「ツ！」11例のうち8例が内田露庵によるものである。すなわち、広津柳浪と内田露庵だけで70以上の用例を占めている。

そこで文末・文節末の「つ・ツ」表記に関わった著者を調べると、1895年が4人、1901年が7人、1909年が8人、1917年が12人、1925年が20人（著者不詳のものをのぞく）であった。はじめは一部の作家が多用していた文末・文節末の「つ・ツ」表記が、年が経つにつれて一般的になっていったことがわかる。1917年および1925年は人数が大きくふえており、1910年代の後半ころから表記の一般化が進んでいったと考えられる。

4.3.3 国定読本に見る語末促音語形の変遷

前節につづき、本節では国定読本における感動詞の語末促音語形の使用について観察する。国立国語研究所は、明治37年4月から昭和24年3月にかけて初等教育で使用された文部著作の小学校用国語教科書6種のことを「国定読本」と呼び、それらにおける用語の全用例を整理したものを『国定読本用語総覧』として刊行している³²。第1期が明治37年（1904）、第2期が明治43年（1910）、第3期が大正7年（1918）、第4期が昭和8年（1933）、第5期が昭和16年（1941）、第6期が昭和22年（1947）より、それぞれ使用されている。各期の教科書の書名は注に示した³³。国語教科書の表記は、同時期の文学作品にくらべ規範性が高かったと思われ、語末促音語形が多用されているとすれば、それはその年代において語末促音語形が一般に定着したことをあらわしていると考えられる。

本稿では『国定読本用語総覧』を用いて、ア～オの28冊に掲載されていた語末促音語形21語

〈表4 国定読本における語末促音語形感動詞の用例数〉

	第1期 (1904)	第2期 (1910)	第3期 (1918)	第4期 (1933)	第5期 (1941)	第6期 (1947)	計
あっ	0	1	2	8	4	10	25
えいっ	0	0	0	0	2	0	2
えっ	0	0	0	1	1	0	2
きゃっ	0	0	1	0	1	1	3
しっ	0	0	0	0	0	1	1
しっしっ	0	0	0	1	1	0	2
それっ	0	0	0	2	1	1	4
はっ	0	0	0	2	2	0	4
わっ	0	0	0	0	0	1	1
計	0	1	3	14	12	14	44

(4.1参照)を対象に、各期の教科書における使用状況を調査した。その結果、8語について使用が確認された。表4は各期・各語の使用状況をまとめたものである。

数字をみると、第3期と第4期の間で用例が増えていることが明らかである。第3期までは4例中3例が「あっ」であったものが、第4期以降は他の形式の使用も増えている。前節でも、1910年代後半から文末・文節末の「つ・ツ」表記が定着したのではないかという予想を立てたが、この結果はそれを裏づけるものである。1910年代後半から文学作品において語末促音語形が多用されるようになり、1930年代になるとその語形が一般的な認識として定着したため、国語教科書においても使用されるようになったと考えられる。

4.4 語末促音語形に関するまとめ

最後に、現代の小型国語辞書における語末促音語形の採録について補足する。本稿で調査したアの6種の辞書(昭和30-40年代刊行)について、語末促音語形を掲載するのは、『新選1』(「とっ」³⁴)と、『新明解1』(「あっ、えっ、しっ、ちえっ、やっ、わっ」)のみである。『新選国語辞典』は第2版から第5版にかけては語末促音語形の採録がなく、1987年の第6版以降に再び採録されるようになる。『旺文社国語辞典』は1986年の第7版、『三省堂国語辞典』は1974年の第2版、『岩波国語辞典』は1986年の第4版、『講談社国語辞典』は1991年の第2版が、はじめて語末促音語形を掲載している。

なお、『明解国語辞典』(三省堂)の初版(1943)には「ちえっ、はっ、わっ」、改訂版(1952)には「あっ、えっ、はっ、やっ、わっ」が掲載されており³⁵、昭和30年代より前の小型国語辞書に、語末促音語形が皆無というわけではない。前節までに述べたとおり、1930年代には感動詞

の語末促音語形が一般的になっていたと考えられ、それが『明解国語辞典』の見出し語に反映されたのだと考えられる。昭和30-40年代の辞書より2000年代以降の辞書の方が、感動詞の収録語数も全収録語数に対する感動詞の割合も増加しており(2.2参照)、それが小型国語辞書に語末促音語形が掲載されてゆく要因の一になったのだと思われる。

第4節では、中世以降の辞書や文学作品等の用例を観察し、感動詞の語末促音語形の変遷をたどってきた。これまでに述べたとおり、現代において「あっ、えっ、わっ、……」などの語末促音語形が「驚き」等の際に「声に出して発せられる」と認識されているのは、近代以降の文学作品の表記や近代国語辞書の語釈の影響が大きいと思われる。実際の発話の場面において、「語末促音」は発話末で認識することができず、意味を弁別する要素にならないのであるから、語末促音語形は、非語末促音語形から独立した存在ではないといえる。「あっ」は「あーあ」と同じく、「あ(あ)」という語の用法の一にすぎない。小説等の会話文において、感動詞の語末、および文末・文節末における小書きの「っ」は驚き等をあらわす標識とはなるが、それは実際の話しことばとは関係がないものである。

5. おわりに

本稿では、現代における感動詞の一般的な認識について小型国語辞書を用いて調査し、音声上の問題について考察した。本稿で明らかにできたことは、以下の二点である。

ア. 従来「特殊なアクセントを持つ感動詞」と認識されてきた「まあまあ」、「あーあ」、「そーお」などは、発話の中で語を「かさねる」こと、および発話中の「なげき」・「疑問」等のイントネーションによってあらわれる形式であり、「まあ、あ(あ)、そう」

などの用法の違いにすぎない。

イ. 現代では聞き分けることのできない「語末の促音」によって「驚き」等の感動が表出されるという認識は、特に近代における表記や国語辞書の語釈に影響されたものであり、語末促音語形は非語末促音語形から独立した存在ではない。

本稿では主に文献の通時的な調査を行ったが、分量が十分でなく、また資料の種類にもかたよりがあった。今後は近現代の漫画雑誌など、さらに資料を充実させた上で、本稿であつかえなかった語末の長音・撥音の問題や、文章に用いられる挨拶語の問題など、現代日本語における感動詞の認識・定義の問題について、さらに考察を進めてゆきたい。

【注ならびに参考文献】

1. 大槻文彦「語法指南」(『言海』第一冊所収、1889)、pp. 65-70。大槻以前にも、金山秀澂・志田為三郎編『新編大日本傍聴筆記法与便』(稲田植光、1886)に「感動詞」の術語を用いる例(pp. 118-121)などがみられる。大槻は係助詞や希望・感動の終助詞の類を感動詞にふくめており、金山・志田の方が現代日本語における感動詞の考え方に近い。『言海』(請求記号: 813.1-O932g)・『新編大日本傍聴筆記法与便』(請求記号: 特22-831)ともに、国立国会図書館所蔵のものを確認した。
2. 清水泰生「小型国語辞典からみた応答詞、感動詞について」(近思文庫編『日本語辞書研究 第3輯下 木村晟先生博士古稀記念』、港の人、2005)
3. 調査に使用した辞書は、以下に示すもののぞき、当該の版の第1刷である。
『三省堂1』: 1961年1月の第2版(刷)、『岩波1』: 1970年2月の第23刷、『講談社3』: 2008年4月の第2刷、『現国例4』: 2010年12月の第5刷、『学現標2』: 2012年4月の第2刷、『例解学9』: 2012年3月の第9版ドラえもん版・第4刷。
4. 『新小辞5』ならびに『デイリ5』はハンディータイプの辞典である。
5. 『新選9』、「この辞典を使う人のために」、p. 11より。
6. 「さらば」など、「感動詞」と「あいさつ」の両方に分類されている語もあるが、先に示された品詞を優先し、二重には集計していない。なお、『新選9』巻末に示された品詞別の語の内訳では、感動詞は110語、あいさつ語は63語となっている(複数の品詞に属する語は、特徴的なもので代表させられているため、表2の数字とは一致しない)。
7. 金田一春彦監修・秋永一枝編『新明解日本語アクセント辞典第2版CD付き』(三省堂、2014)、「解説」、p. 21より。
8. 「そーお」は『三省堂7』のみ掲載。「あーあ」は『三現新4』にも「あああ」の見出しで掲載されている。なお、『三省堂国語辞典』第6版では、これらはそれぞれ「あああ」、「そーお」の表記で見出しに立てられている。
9. KTH, <http://www.speech.kth.se/wavesurfer/>.
10. ただし、「いよっ、うえっ、うっ、しっしっ、ちっ、ちっちっ、ぶはーっ」は『三省堂7』のみ、「きゃっ、ぎゃっ、それっ」は『新明解7』、「ははっ」は『明鏡2』、「えいっ」は『学新国4』、「とっ」は『新選1』にのみ掲載されている。もっとも多くの辞書に掲載されているのは、「あっ」の21冊である。
11. 那須昭夫「オノマトペの語末促音」(『音声研究』11-1、日本音声学会、2007)、p. 47。
12. たとえば定延利之編・定延利之・森篤嗣・茂木俊伸・金田純平『私たちの日本語』(朝倉書店、2012)では、驚きの「あっ」や「げっ」など、語末に「っ」が表記されると、「喉の

- あたりに力を入れて、肺から上がってきた空気の通り道をしっかり閉鎖する」ことによって、直前の子音を短く切ることを意味するとしている（金田純平執筆、p. 61）。
13. たとえば富樫純一「感動詞・応答詞の分析手法」（『日本語学』32-5、明治書院、2013）では、「あっ、わっ、きゃっ、ぎゃっ、おっ、げっ、……」などの形式を、「いわゆる“驚き”を表す感動詞」として挙げている。なお、本稿はあくまで感動詞の「語形」に関する認識の問題についてとりあげているのであり、富樫をはじめとする先行研究における感動詞の意味分析の方法と結論を否定しているわけではない。富樫は、感動詞、応答詞の意味の本質は「話し手の心内の情報処理と対応していると捉えられる」（p. 27）と述べており、“驚き”を表す感動詞について、具体的な意味分析を試みている。
 14. 佛中・二十五丁裏・4-5行目。『天理圖書館善本叢書と書之部第三十二巻 類聚妙義抄觀智院本佛』（天理大学出版部、1976）にて確認した（p. 166）。
 15. 地・二十丁裏・3行目。中田祝夫『古本節用集六種研究並びに総合索引』（風間書房、1968）所収のものを確認した（p. 308、写真番号175）。
 16. 長崎版日葡辞書のOxford大学 Bodleian Library 所蔵本（『日葡辞書』、勉誠社、1973）を確認した。
 17. 語釈は土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店、1980）による。
 18. 小松英雄『日本語の世界7 日本語の音韻』（中央公論社、1981）、pp. 198-199の記述を参考にした。
 19. 笹野堅編『古本能狂言集 一』（岩波書店、1943）を確認する（p. 280）とともに、本書を底本とする大塚光信編『大蔵虎明能狂言集 翻刻註解 上巻』（清文堂出版、2006）にならない、「（太郎冠者）」「（大名）」と登場人物の名を入れた。変体仮名は現行の仮名字体に直し、記号類の表記は省略した。なお、この引用箇所には「噫」に「アツ」のふりがなを付した頭書がある。
 20. 巻第二、十七丁裏。早稲田大学図書館所蔵（請求記号：リ05. 12563. 1-20）の『太平記』巻第一〜四十（富春堂、1603。全二十冊）を確認した。ふりがなは省略した。
 21. 早稲田大学図書館所蔵（請求記号：ヘ13. 3474. 1-16）の式亭三馬編・北尾美丸画『浮世風呂』（美濃屋甚三郎、1810-20）の第一冊、十一丁表。前編は文化6年（1809）刊の再補刻である。変体仮名は現行の仮名字体に直し、ふりがなは省略した。
 22. 早稲田大学図書館所蔵『浮世風呂』（注21に同じ）の第二冊、一丁表。くの字点のくりかえし符号は「ㄣ」と表記した。
 23. 巻之四・「武事」より。近藤活版所発行の『嬉遊笑覧』（1897初版、1903再版）には、「オテツは〔猿楽狂言記〕すまふの処におてつまいつたおてつかつたぞなどいふことあり（中略）今狂言のうへにては唯おてとのみいふにて手とつよくいふ故ツは口にありそれを其儘にうつし書るなり」（再版、p. 493）とある。また作者の自筆本を底本とする岩波文庫版では、「○おて、『猿楽狂言記』すまふの処に、『おてつ、まいつた。おてつ、勝たぞ』などいふ事あり。（中略）ツは語勢にて、手とつよくいふ故、ツは口にあり、それを其儘にうつし書るなり。今、狂言のうへにては、只おてといふにて知べし。」（長谷川強ほか校訂『嬉遊笑覧（二）』、岩波文庫、2004、pp. 336-337。巻之四は石川了校訂）としている。上記の引用に際し、変体仮名は現行の仮名字体に直した。

24. 国立国会図書館所蔵（請求記号：359-24）
の上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』第一～四巻（金港堂書籍、1915-19）を確認した。
25. 国立国会図書館所蔵（請求記号：R813.1-D19ウ）の『大辞典』第一～二十六巻（平凡社、1935-38）を確認した。
26. 国立国会図書館所蔵（請求記号：342-119）の山田美妙『大辞典』上・下巻（嵩山堂、1912）を確認した。
27. 飛田良文・松井栄一・境田稔信編『明治期国語辞書大系〔普1〕語彙』（大空社、1997）所収の、木村正辞・横山由清総裁『官版語彙』巻一～十三（編輯寮・文部省編輯局、1871-84）を確認した。注28の引用も同書による。
28. 『官版語彙』巻一、「語彙凡例」、二丁裏。変体仮名は現行の仮名字体に直した。
29. 国立国語研究所編『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』（博文館新社、2005）
30. たとえば「すると旦那は『鮭のカツレツ。』と仰やいました。」（ビ・エル・フアルジャン作・延原謙訳「長篇探偵小説 ハートの九『第二回』」、1925年7号。『太陽コーパス』の検索結果からそのまま引用した）のようなものは用例からのぞいている。
31. 感動詞か否かの判断は、その語末促音語形および「つ・ツ」表記をのぞいた語形（「あらツ」に対する「あら」など）がア～オの28冊の辞書に掲載されているかに基づいたが、そのほかにも「オホ、ゝゝツ、ひ一つ」などの笑い声や悲鳴なども用例とした。
32. 国立国語研究所編『国定読本用語総覧』1-12（三省堂、1985-97）
33. 第1期：『尋常小学読本』（今日イエスシ読本と俗称）一～八、第2期：『尋常小学読本』（今日ハタタコ読本と俗称）巻一～十二、第3期：『尋常小学国語読本』（今日ハナハト読

本と俗称）巻一～十二、第4期：『小学国語読本』（今日サクラ読本と俗称）巻一～十二、第5期：『ヨミカタ』一～二 『よみかた』三～四 『初等科国語』一～八（今日アサヒ読本と俗称）、第6期：『こくご』一～四 『国語』第三学年（上下） 第四～六学年（各上中下）（今日みんないいこ読本と俗称）。『国定読本用語総覧』1、「解説」、p.4（書誌情報は注32を参照）の記述を参考にした。

34. 「咄」。他の辞書では「とつ」として見出しにあがっており、『新選国語辞典』でも第2版以降は「とつ」となっているため、誤記の可能性もある。
35. 初版は『明解国語辞典 復刻版』（三省堂、1997）を、改訂版は改訂97版（1963）を確認した。ア～オの辞書28冊に掲載されていた語末促音語形21語のみを対象に調査したため、他にも語末促音語形が収録されている可能性はある。

なお、上記のうち、「国立国会図書館所蔵」と記した資料は、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」<http://kindai.ndl.go.jp/>、また、「早稲田大学図書館所蔵」と記した資料は、早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>にて閲覧したことを示す。

付記

本稿は、語彙・辞書研究会第43回研究発表会（2013年6月8日、新宿NSビル）、および、早稲田大学日本語学会2014年度前期研究会（2014年7月5日、早稲田大学）における口頭発表を基に執筆したものである。発表に際しご意見を賜った皆様に、感謝申し上げます。